

産業別生産高の変化(1960-1979)

	1979年の 寄与率	1960-1969	1970-1979	1979
農業	2.8	2.1	2.5	-1.1
農業以外の第1次産業	4.0	4.7	2.6	6.3
製造業	22.5	6.4	3.7	3.3
建設業	6.2	4.0	2.9	2.0
生産部門の合計	35.4	5.4	3.3	2.9
運輸、倉庫、通信、公益事業	13.3	6.5	6.0	6.5
貿易	11.9	5.0	4.6	1.9
金融、保険、不動産業	13.2	4.7	5.4	3.4
コミュニティ、企業、個人サービス	19.4	6.3	4.2	3.2
行政	6.8	2.6	3.3	-1.3
サービス部門の合計	64.6	5.1	4.8	3.2
総計	100.0	5.3	4.2	3.2

Statistics Canada, Indexes of Real Domestic Product by Industry

産業別雇用率の変化(1960-1979)

	1979年の 寄与率	1960-1969	1971-1979 ¹⁾	1979
農業	4.7	3.0	0.7	2.1
農業以外の第1次産業	2.6	0.8	2.6	5.8
製造業	20.0	2.3	1.8	5.9
建設業	6.2	1.5	3.6	1.4
生産部門の合計	33.4	0.9	1.8	4.5
運輸、倉庫、通信、公益事業	8.7	1.8	2.8	4.8
貿易	17.4	2.6	3.5	3.9
金融、保険、不動産業	5.3	4.9	4.3	1.5
コミュニティ、企業、個人サービス	28.4	6.5	4.2	4.8
行政	6.8	3.8	3.7	0.1
サービス部門の合計	66.6	4.1	3.8	3.8
総計	100.0	2.7	3.0	4.0

Statistics Canada, The Labour Force

種鉱物も、国内需要をまかない、余分を輸出に回している。

主要国の通貨に対して、最近のカナダドルは安値傾向にある。この結果、カナダ製品の国際競争力は強化された。カナダは現在でも製品貿易ではかなりの赤字を余儀なくされているが、それでも食糧以外の最終製品(完成品)の輸出高は、一九七一年から七九年の間に倍増した。同期間中の半製品輸出の伸びは約四割増、原材料の輸出高は若干の減少を示した。これはカナダ製品の競争性の高さを示すもので、今後のプラス要因である。

カナダは、従来、高賃金国といわれてきたが製造業の現場労働者の賃金で見ると、米ドルで計算したカナダの賃金水準は決して高くない。スウェーデン、西ドイツ、オランダ、ベルギー、ノルウェー、スイスなどといった欧州諸国は、製造業

労働者に対して、一時間当たりカナダの四割以上も払っているのである。これまで指摘されてきたカナダと日本との製造部門における大幅な賃金格差も、今ではかなり縮小されている。

カナダにおける中・長期の一般投資動向は、総じて非常に明かるい。大方の経済専門家の判断によると、今後最終需要の持続的増大を実現できるかどうかは、ひとえに投資如何にかかっているという。まず考えられるのはパイプラインや合成原油精製工場の建設、発電能力の拡大といったエネルギー関連の大型投資だが、これは鉱業あるいは林業一般のそれよりかなり高い率でふえるものと思われる。もう一つ大きな投資促進要因として、製造部門をあげることができる。これは自動車産業が、将来に向けて燃費効率の高い小型車を開発するため、多額の投資をするだろうからである。また、近い将来、労働力増加がかなり緩やかなペースに落ちるため、それをカバーする上で生産性向上が不可欠となり、そのための投資もかなり多額に必要となる。

ここに、一九七九—九〇年の投資必要総額に関する一つの予測がある。カナダ投資機関係協会が最近

広範囲に利用している信頼性の高い調査報告書である。それによると、七九—九〇年の投資必要総額は一兆四千億ドル、年平均にして一千億ドルをはるかに超える額になるといふ。このうち約二八パーセント、四千六十億ドルがエネルギー関係の投資である。また、全体の六パーセント(八百六十億ドル)を外国からの投資と見込んでいる。

別の、やはり信頼できる調査機関の最近の調査によると、今後期待できる投資規模一千万ドル以上の大型プロジェクトとしておよそ七十五件をあげている。総額では一千億—一千二百億ドルになる勘定である。

また、ある有力な経済観測筋の見解からしても、八〇年代はほぼ毎年、企業の実質投資が推定経済成長率の三・七パーセントをかなりの程度上回ることになりそうである。

資源産業と資源加工産業

カナダは、世界に類を見ないほど豊かつ多様な資源に恵まれている。鉱物・森林・農業資源はカナダの輸出に大きく貢献しているし、カナダに国際競争力のある高度な製造業が発達しえたのも、ひとつにはこれらの資源のおかげである。激しい競争下にある現在の世界市場において、こうした強力な資源の存在がカナダをきわめて有利な立場においている。

鉱物と金属

カナダは鉱物の輸出額では世界第一位、生産量では米ソに次いで世界第三位となっている。カナダの経済発展に鉱業が果たしてきた役割は大きい。

鉱物の輸出額はカナダの輸出全体の約二割を占める。生産される鉱物の半分以上が、世界九十数か国に輸出されている。カナダはニッケル、亜鉛、アスベスト



ケベックのアスベスト採掘現場

の生産では世界一、金、ウラン、モリブデン、チタン、石こう、塩化カリ、銀、硫黄、コバルト、ブラチナメタル、鉛では世界第二ないし三位であるほか、アルミニウム、鉄鉱石、マグネシウム、銅その他数種の鉱物でも世界の上位生産国に入る。

したがって、カナダを本拠とする、世界的に有名な多国籍金属企業がいくつもあったとしても、少しも不思議はない。たとえば、日本にも投資先をもつINCO、アルカン、コミンコなどがその一